目　次

古代の貨幣
無文銀銭……1
富本銭……2
皇朝十二銭……4
中世の貨幣
（1）中国銭の普及……32
（2）鎌倉幕府と貨幣……35
（3）建武の中興と貨幣……36
（4）私鋳銭の登場……36
（5）明朝銭の渡来……37
（6）銅貨の混乱……38
（7）石見銀山の発見……40
（8）甲州金……41
（9）加賀の貨幣……42
（10）戦国大名と金銀……42
江戸時代初期の貨幣
（1）初期の慶長金……48
（2）慶長金銀の制定……51
（3）慶長銀の誕生……55
（4）慶長銀……56
江戸時代の領国貨幣
（1）毛利氏の判銀……61
（2）甲州金……62
（3）加能越の銀貨……65
（4）諸国灰吹銀寄……66
江戸時代の銅銭
（1）江戸時代初期の銅銭……69
（2）古寛永銭……73
（3）長崎貿易銭……76
（4）新寛永銭……76
（5）紙幣の登場……78
改鋳の時代－動揺する貨幣
（1）元禄の改鋳……81
（2）宝永期の貨幣……84
（3）正徳・享保の貨幣……88
（4）正徳期の銅銭……91
貨幣制度の再建－新しいバランス
（1）元文の改鋳……95
（2）明和期の貨幣……99
（3）文政期の貨幣……103
（4）天保期の貨幣……106
（5）嘉永期の貨幣……111
（6）安政期の貨幣……114
（7）万延・文久期の改鋳……121
（8）幕府紙幣……125
（9）幕末～明治初頭の地方貨……126
（10）天保通寶……134
明治初期の貨幣……139
洋式の貨幣（不換紙幣の時代）……147
洋式のコイン（新貨条例の制定）……152
円銀の時代
日本銀行券（兌換銀行券）の発行……159
金本位制への挑戦……162
第１次大戦と通貨（高額紙幣の強化と銀貨の軽量化と卑金属化）……169
昭和の貨幣（金本位制への復帰失敗から戦時貨幣へ）……172
戦後の貨幣
（Ⅰ）急激なインフレ期の貨幣（昭和 20 年～ 24 年）……179
（Ⅱ）国際社会への復帰と貨幣（昭和 24 年～ 31 年）……185
（Ⅲ）高度成長期の貨幣（昭和 30 年～ 39 年）……190
（Ⅳ）記念貨の時代始まる（昭和 39 年～）……193
（Ⅴ）ハイテク時代の紙幣（昭和 59 年～）……197
（Ⅵ）令和の新紙幣……200
近代貨幣の手変り……202

この手引書をお読みになる皆様へ

※本書中、JNDA- とあるのは『日本貨幣カタログ』に掲載の貨幣を指しています。日本貨幣商協同組合は毎年、『日本貨幣カタログ』を編纂、発行しております。同カタログと併せお読みいただけると、より一層理解しやすいと思います。

※ 本書に掲載の写真は特別なことわりのない限り、硬貨は原寸、紙幣は1/2に縮尺してあります。

古代の貨幣

無文銀銭

写真１は平成７年２月に滋賀県の尼子西遺跡から出土した「無文銀銭」です。直径は32ミリ、重量は10.33グラムです。

表１は「無文銀銭」の出土状況です。滋賀県と奈良県から集中的に出土し、京都から１枚しか出土していないということから、主に平安時代以前に使われた遺品であるらしいことがわかります。

写真１　無文銀銭

このうち、崇福寺（滋賀県大津市）の12枚は三重塔跡の心礎から昭和14年に発見されました。同寺は西暦669年に天智天皇の命により大津宮（現大津市内）の北西の山中に建立されました。無文銀銭が既に存在したことがわかります。大津宮が大和朝廷の宮都であったのは西暦667～672年と短期間でしたが、この地域は壬申の乱の舞台であるとともに交通の要所でもありました。

奈良県の場合、無文銀銭は飛鳥京（６世紀末～７世紀末）、藤原京（694～710年）、平城京（710～784年）でも見つかっています。かなり長期にわたって使われたことがわかります。

大阪府では２箇所でみつかっていますが、その一例は難波京です。難波京は孝徳天皇の645年から造営が始まり、天武天皇の陪都としても使われました。

無文銀銭の重量は6.7～11.1グラムとかなり広範にわたり、銀片を張り付けたものも多数あります。また、表面に記号「○」、「×」を刻んだものや、文字「田」、「大」、「伴」、などを刻んだものも見つかっています。

「無文銀銭」とは何なのか？ これまでいろいろな説が出されてきました。例えばこれは厭勝（まじない）銭であり通貨ではないとする説、また、銀地金として交換の媒体にはなったが貨幣とは呼び難いとする説です。しかし、貨幣であるとの説も出されていました。その根拠は、確かに無文銀銭の

表１　無文銀銭の出土状況

遺跡名（所在地）	点数
滋賀県（６箇所、計17枚）	
1　崇福寺跡（大津市滋賀里町）	12
2　唐橋遺跡（大津市瀬田）	1
3　狐塚遺跡（栗東市安養寺）	1
4　赤野井湾南遺跡（守山市赤野井）	1
5　尼子西遺跡（犬上郡甲良町尼子出屋敷）	1
6　霊仙寺遺跡（栗東市霊仙寺）	1
京都市（１点）	
7　小倉別当町遺跡（左京区北白川）	1
奈良県（８箇所、計８点）	
8　川原寺跡（明日香村川原）	2
10　飛鳥京跡（明日香村岡）	1
11　石神遺跡（明日香村飛鳥）	1
12　藤原京左京六条三坊（橿原市四条町）	1
13　谷遺跡（桜井市谷）	1
14　平城京右京三条一坊（横領町）	1
15　平城京右京二条三坊四坪	1
16　飛鳥池遺跡（明日香村）	
大阪府（２箇所、101点）	
16　船橋遺跡（柏原市船橋）	1
17　真宝院町（大阪市天王寺区）	約100
三重県（１箇所、１点）	
18　北野古墳（鈴鹿市加佐登町）	1

「丸極印打弐人板之両端ニ打、大黒極印打弐人中絵江並而弐ツ、上下無之様入違ニ打、脇極印打三人丸と大黒との間江並而弐ツ打、又取直而弐ツ、各丸之方を文ノ字之上ニ取都合四ツ打、板壱枚ニ極印数八ツ有之。各打様は最初打候而上下取直又打、依之板ニ極印之上下無之」

丸極印を打つ役が２人、大黒極印を打つ役が２人、脇極印を打つ役が３人、都合７人がチームになって流れ作業で打ったことがわかります。極印は上下が出ないように打ち回したようですが、まず、丸極印を打つ役は板を取って一方の端に丸極印を１個打ち、回してもう１個打ちます。丸極印を打つ役はひたすらこの作業を続けたのでしょう。次に大黒極印を打つ役は中央片側に１個打ち、回して１個打ちます。最後に脇極印を打つ役はすでに打たれている丸極印を上に取り、その下に並べて左右２個打ち、板を回してまた丸極印を上に取り同じように２個並べて打ったようです。これなら作業は淀みなくスムースに進行したはずです。

公開オークションにおける金銀貨の落札価格

慶長小判　背：〇き　　極美　　¥1,350,000

慶長小判　背：田　前期　細目打
無刻印　　美 / 極美　　¥1,250,000

円歩金　　美　　¥2,800,000

額一分金　小字　　美＋　　¥1,050,000

慶長一分金　両本　深打　両面額縁
極美＋　　¥860,000

（VI）令和の新紙幣

平成31年（2019）４月、財務省は2024年上期をめどに１万円、5000円、1000円紙幣の新紙幣を発行すると発表しました。

紙幣に採用される肖像は１万円券が渋沢栄一（1840～1931）、5000円券は津田梅子（1864～1924）、1000円券は北里柴三郎（1853～1931）です（写真47～49）。

発表によると、これらの紙幣には新たな偽造防止対策が採用されます。

○新たに高精密なすき入れ（白黒すかし）を導入
○１万円券、5000円券には肖像の３Ｄ画像が回転するストライプのホログラムを採用
○1000円券は肖像入りのパッチタイプのホログラムを採用
○記番号は最大10桁へ変更（アルファベット２桁・数字６桁・アルファベット２桁）

またユニバーサルデザイン（障害の有無・年齢などにかかわらず多くの人が利用しやすいデザイン）実現のため、券種間の識別性向上が図られます。

○指の感触によって識別できるマークの形状および券種ごとの配置変更
○額面数字の大型化
○ホログラム、すき入れ位置の券種ごとの変更

○渋沢栄一・津田梅子・北里柴三郎の略歴

［渋沢栄一］天保11年（1840）、埼玉県深谷市生まれ。近代資本主義の生みの親と言われています。若くして一橋慶喜に仕え、27歳の時慶喜の実弟徳川昭武に随行し、パリ万国博覧会ほか欧州各国を見聞しました。明治維新後大蔵省で井上馨のもと貨幣・金融・財政制度の制定に携わりました。明治６年（1873）に退官後、国立第一銀行、東京商法会議所、東京銀行集会所、東京手形交換所などの創立、さらに各種企業の設立にも尽力しました。民間の銀行や企業など生涯設立に係わった企業は500以上に上ります。大正４年（1915）、第一線を退いてからは教育・文化事業に力を注ぎ、昭和６年（1931）、92歳で生涯を閉じました。

写真47　新１万円券（渋沢栄一）のイメージ

近代貨幣の手変り

（１）近代金貨の手変り

近代金貨の手変り研究は、金貨そのものの高額さと現存数の少なさにより、銀貨にくらべると未だ発展途上といえます。しかし、近年、2005 年から 2008 年まで行われた財務省の金貨放出により、３万枚余の金貨が市場に出回ることになり、比較、研究が進むようになりました。そのため、新たな発見が今後見つかり、発表されるかもしれません。その意味では今後大いに期待できる分野といえるでしょう。

下記にこれまでに発表された関係文献の一部をご紹介致します。今後の研究の参考にしていただければ幸いです。

【旧 20 円金貨】
・『収集』書信館出版（株）、1998（第 23 巻第 10 号）、13 ～ 14 頁
【旧 10 円金貨】
・『収集』書信館出版（株）、2008（第 33 巻第３号）、18 ～ 24 頁
【旧５円金貨】
・『収集』書信館出版（株）、2008（第 33 巻第７号）、23 ～ 35 頁
・『収集』書信館出版（株）、2008（第 33 巻第９号）、17 ～ 28 頁
・『収集』書信館出版（株）、2009（第 34 巻第５号）、9 ～ 16 頁
【旧２円金貨】
・『収集』書信館出版（株）、2008（第 33 巻第 11 号）、10 ～ 21 頁
【旧１円金貨】
・『収集』書信館出版（株）、2010（第 35 巻第５号）、33 ～ 46 頁
【金貨全般】
・『日本金貨原色図鑑』太田保編、万国貨幣洋行　1980 年
・『近代金貨オークションカタログ』財務省、2005 ～ 2008

(2) 近代銀貨・銅貨の手変り

Ａ．１円銀貨（円銀）

図１　正貝円

図２　普通円

図３　増正貝

（イ）１円銀貨　明治３年銘

竜面の極印は１タイプです。ただし、使用時に起きた磨損と補修により部分的な変更がいろいろ見られます。

図４　欠貝円

図５　半欠貝

「円」字の変化は「正貝円」（図１）、「普通円」（図２）、「増正貝円」（図３）、「欠貝円」（図４）などがあります。

正貝円は打刻を始めて間もない１円銀貨の「貝」画です。普通円は貝画の前足に磨損が生じています。現存品は殆どこのタイプなので普通円と呼ばれます。増正貝円は

図６　有　輪

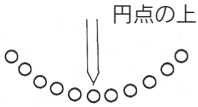

図７　無　輪